

梅棹忠夫論序説

— 横山亮一・和歌森太郎・家永三郎に触れながら —

天 沼 香

はじめに

2010年7月3日11時7分、梅棹忠夫がこの世を去った。まだ90歳になったばかりだった。老衰といわれる死因がまったく不似合いな、失明の後も、老後においても瑞々しい学問的知性と人間的感性を持ち続けた人だった。

自らを「明るいペシミスト」と称しながら、その実、梅棹の辞書のなかには、老後などという、ややペシミスティックな響きの、後ろ向きな言葉は存在しなかったであろうと思われる。もちろん、確たる諦観を有し、老荘思想にも通暁した、自己省察には厳しい人ではあったけれども。

梅棹の死は、彼の著作と彼自身の存在によって、学問研究の道に魅せられていった私にとっては、ひとつの時代の終わりを意味している。

そこで、まことに勝手ながら、今回は、紀要原稿の内容を変更させていただき、梅棹忠夫について、そして同時に、既に鬼籍に入ってしまった横山亮一、和歌森太郎、家永三郎の三恩師についても、そのもろもろを、殊に彼らの人間的な側面を、私との関わりをもとに、少しだけ、語らせていただくことをお許し願いたい。

1. 「はじめに」に続けて、あるいは個人的横山・和歌森・家永・梅棹論

学問研究の道へと導き入れてくれたのみならず、学究としての、そして人間としての生き方をも、問はず語りのうちに教えてくれた、梅棹忠夫という学問的巨星の死に、私の心中における追懐の念はいまだ覚めやらず、深い寂寥感を覚えたままである。この個人的な感傷には、梅棹が敬慕する四恩師のうちの最後の生き残りだったことや、彼が私の父と同年の生まれで大学の同窓生だったことも関係しているかもしれない。

本来なら、敬愛する梅棹に対して、先生とか、博士とか、教授とかいった何らかの敬称を付けて叙述すべきであり、文章にも尊敬表現を用いるべきであろう。

しかし、私たちのような、ずっと年下の後進に対しても、一向に「権威」ぶることなく、「梅棹さん」と呼ばれることを好み、私たちを他者に紹介するときには、「年若い友人」「年下の友人」といった言い方をしてくれて

いた梅棹忠夫だったので、本文章では、あえて、敬称を付けず、尊敬表現もしないこととしたい。

梅棹はむしろ、よろこんでそれを了とされる、いや、了とすることを私は知っているからである。

本稿は、単なる偉大なる師への私なりの追悼文などではなく、もう少し客観性と発展性のある文章にしたいと考えてはいる。

しかし、いまだにその死を受容しかねている現在の私にとって、どこまでそれが可能なのか、はなはだ不明であることをまず告白しておかなければならない。今という時点における私には、私的な感情、少なからぬ感傷が文中に混入してくることを防ぎ切ることが難しいと言いつけるからだ。

これで、私は、心底から尊敬してきた四人の師すべてを失った。

この機会に、ほんの少しだけ梅棹を語りたい。そして彼と同様、あるいは時に彼以上に、私の学問の形成に関してのみならず、生き方のようなものに関しても、筆舌に尽くしがたい多大な影響と恩恵を与えてくれた三人の恩師、横山亮一、和歌森太郎、家永三郎に関しても、その学問と人間性の一端について語っておきたい。

この三師についても、敬称を付すること、そして尊敬表現は止めることとする。その理由は、梅棹の場合とほぼ同様である。

本稿はこういう次第で、稀代の旅人、梅棹忠夫が永遠の旅へと旅立ったことに触発されて、急ぎよ予定を変更して書かれることになった四人の師をめぐる文章なので、いわゆる学術論文とは異なるものとなるに違いないことを、ご賢察、ご海容いただきたく願う次第である。

2. 横山亮一、あるいは光を失ってなお明るい透徹した理論家

ヒューマン・エコロジー（人間生態学）という、アメリカ合衆国では一世を風靡しながら、日本ではさほど隆盛をみることなく終わった感のある学問がある。

この分野の日本における第一人者であり、都市社会学の新たな分野の開拓者でもあったのが、横山亮一だった。⁽¹⁾

50代半ばに入るまでの彼は、九州から北海道に至る

まで、旧制大分中学から帯広高等獣医学校（現、帯広畜産大学）まで、その真ん中の大阪学芸大学（現、大阪教育大学）、愛知県立大学等、日本各地のさまざまな教育機関、研究機関に職を得て、研究を深化させながら、教育者として、その時々を生徒、学生たちに、学問的には厳しくも、温かい眼差しで接して慕われていた。「こち亀」ではないが、「りょうさん」と年上の人びとからも年下の人びとからも親しげに呼びかけられていた。

横山の学問的力量は、彼の郷里、瀬戸からも近い名古屋にある愛知県立大学在任時代に一挙に開花した。実証の裏付けもある彼の透徹した理論は、学界において顕著に認められ、社会学の泰斗、農村社会学者の福武直、都市社会学者の磯村英一らの後継者的な存在に擬せられ始めていた。彼は、当時、磯村らを擁して、都市社会学研究のメッカだった東京都立大学（現、首都大学東京）に迎えられることになった。横山の学問人生は、順風をはらんで満帆だった。

が、好事魔多し。横山は、その学者としての活動の極相期ともいうべき50代半ばにして、緑内障のために失明してしまったのだった。中原に鹿を追うことは、夢のまた夢と遠のいていった。

彼は、なかなかその冷厳な事実を受け入れられず、自暴自棄になりそうになったことも一再ならず。

けれども、彼の自暴自棄は、その妻、富貴の奮闘によって救われた。⁽²⁾

彼女は、光を失って、行動の自由、とりわけ学問人にとって致命的と言っても全く言い過ぎではない、読む自由、書く自由、歩く自由を奪われた横山の目となり、手となり、足となったのだ。

それだけではない。何と彼女は、自らもヒューマン・エコロジーや都市社会学を学び始めたのだった。門前の小僧が経を読むどころの騒ぎではなかった。もともと、きわめて明晰な思考力と判断力に恵まれていた彼女は、凡百の社会学者などよりずっと説得力のある論展開をすることしばしばだった。

「シカゴ学派に関する理解は、わしよりよっぽど深いんだ」と横山は、頼もしそうに語ってくれたものだ。

「わしの目さえ、少しでも見えてたら、これ（＝富貴夫人のこと…横山は決して、女性をモノ扱いして、「これ」と称したわけではない。一種のくせで、自分の左隣に座っている人のことを、男女を問わず「これ」と称していた）と一緒に、ロバートとヘレンの lind 夫妻みたいに、日本の小さな町でフィールド・ワークをやって、彼らくらいの業績は出せたんだがなあ」。

時折、横山は、見えない眼で遠くを見やりながら、富

貴への敬意と慈しみの念を、こんなふうに表示していた。

江戸時代の街道筋の面影が色濃く残る有松の自宅から、名古屋市瑞穂区にあった大学までの決して短距離ではない道のり、富貴は横山の手をとって導いていった。

そのみならず、大学での講義に際しては、横山とともに教室に行き、教壇に立って、彼になり代わって、自ら作成したプリントを読み、板書をした。その間に、横山が卓越した記憶力をもとに、該博な知識と学問的発想力をもって講義をおこなった。⁽³⁾

私が、横山亮一と富貴の話を知り、研究室を訪ね、その聲咳に接するようになったのは、ちょうどこの頃だった。

目が不自由とはどうしても考えられないくらいに、学問的情熱に満ちた魅力的な講義の終了後、毎週のように、横山夫妻は、自分の研究室のゼミ生でもない、本城二郎（大阪大学）、高橋えり子（コロンビア大学）、私の三人を、自宅にいざなってくれた。

もっと、深く学びたいだろう、という横山の推測によるいざないだった。

師のこの推測は、三人ともに関して「当たり」だった。

学びたいという欲求を持っている者には、最大限に学ぶ場を提供することこそが教育者の務めであり、喜びであるという認識を横山も富貴も盛りだくさんに持っていてくれたのだ。教育者のあり方を、自らの実践で教えてくれた横山だった。

夜を徹して、ロバート・リンド、ヘレン・メリル・リンド夫妻の手になる『ミドル・タウン』、ロバート・レッドフィールドの『ザ・リトル・コミュニティー』、イーライ・チノイの『ソシオロジカル・パースペクティブ』、そしてプロニスラウ・マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』、クロード・レヴィ＝ストロースの『悲しき熱帯』、『野生の思考』、マーガレット・ミードの『メール アンド フィーメール』、梅棹忠夫の『文明の生態史観』等々を次々と読破した。

これらの著作を、横山の適切な注解をもらいながら読み込むことは、貧乏学生だった私たちには知的興奮を味わえる至福の時だった。おまけに、その間には、富貴夫人の妙心寺仕込みの料理まで味わうことができた。江戸時代の碩学、手島堪安を係累に持つという彼女は、若いころ、同寺の庫裏に関係していたことがあったのだ。

横山夫妻との読書会で、私たちは、都市をフィールドとして生態学的、人類学的にヴィヴィッドに把握する方法、文化相対主義的な観点から異文化を理解する方法等、そして機能主義や構造主義を学んだ。

それとともに、横山亮一・富貴夫妻の来し方そして現

在から、「家族」という存在の重さをも学んでいた。私が、「家族」という存在に、学問的に関心を持つようになったきっかけは、まさに、この師夫妻との出会いだった。

今でも、この師夫妻のありようは、私のなかでは、夫婦像のひとつのイデアル・タイプとなっているかもしれない。

梅棹忠夫の『文明の生態史観』を読んだ時、あれこれ私たちに十二分に語らせた後、横山は温顔に力を込めて、こう言った。

梅棹忠夫のこの本の価値は、かなり大きいかもしれないぞ。実証性に乏しいとか、仮説に過ぎないとか言う批判はいくらでもできる。しかし、このスケールの大きさは相当なものだ。日本人離れしている。わたしには、残念ながら、こんな雄渾な発想はできんな。すごい発想力を持った男だ。こういう男は、わしみたいに、こそこそ外来の理論をこねくり回したり、ちまちましたような実証はせんでもええんだ。

すごい言葉だと思った。なんとも示唆的だった。なんでもない、ごくさりげない言葉のようにみえて、凡人にはなかなか発することのできない重い言葉だった。研鑽を積んだ末に、学問人としての己を知り、相手を知った横山だからこそ、さりげと言える言葉のように思えた。

横山は、梅棹を文明史家のアーノルド・トウィンビーなどになぞらえているふうでもあった。

1910年生まれの横山にとって、1920年生まれの梅棹は、ちょうど十年後輩ということになる。その梅棹の代表作の一つ『文明の生態史観』に関して、実証性などの点について鋭い批判の刃を向けながらも、それを封印してもよいくらいに、梅棹の発想の大きさ、豊かさを、彼に対する敬意を持って語ってくれた横山だった。

多感な学生時代に、横山夫妻から受けた学問的な恩、人間的な恩、世俗的な恩、その他もろもろの恩の数々は、天の果てまで並べ立ててみてもまだまだ尽せないほどである。

2. 和歌森太郎、あるいは華のある豪快な「嵐を呼ぶ男」

和歌森太郎は、千葉は佐倉の産。坂東太郎、利根川が太平洋にそそぎこむところに出来た町、銚子で育った。だから彼は、後年、俳句に親しむようになってからは、俳号を坂東太郎と称していた。

俳号のように、豪放磊落な学者だった。学者というような狭い枠組みからは、しょっちゅうはみ出してしまうようなスケールの大きい人物だった。おしゃれで、色好

みで、あくまでスマートでかっこうよかった。和風に洋風を混ぜていうなら、粋なダンディーという表現がしっくりする人だった。やたらと女性にもてる人だった。

でありながら、バンカラ風を愛好する一面もあり、学生と一緒に高歌放吟したり、コンパでは、すばつと半裸になって、へそに鉛筆をねじ込んで、学生たちの歌うおかしな節回しに乗って、おかしな踊りを披露してくれたりもした。

学者として一流であることは言うに及ばず、教育者としても素晴らしい人だった。ともかく学生に対し、学問を教授することに関して、懇切丁寧で、優しく温かかった。よく文京区の閑静な住宅街にある自宅に呼んでくれた。もちろん、学問を職業とすることに関しての心構えを手ほどきしてくれるためだった。

柳田國男の後継者を自任する和歌森は、民俗学者であり、歴史学者でもある。よく、二足のわらじを履きながら、史資料を渉猟していると語っていたが、その双方、そして、そのインターディシプリナリーな領域において、あまたの顕著な業績を上げていることは、今更、私が云々するまでもないだろう。⁽⁴⁾

また、和歌森太郎は、梅棹忠夫と同様、組織のオルガナイザーとして、また、そのリーダーとしての才覚にも恵まれた人物だった。同学の士や弟子たちを組織して、全国的な民俗調査を敢行したことはつとに知られている通りである。⁽⁵⁾

この業績により、私たちは、今では見聞きすることが叶わなくなってしまった諸地方の諸々の習俗、民間伝承、年中行事、通過儀礼に、かろうじて文字や写真で接することができるのだ。

この和歌森の業績は、柳田國男の全国の民俗収集事業に比肩されるべき、民俗学分野における一大金字塔といえよう。

彼は、言うまでもなく、柳田の単なるエピソードではなく、柳田の民俗学方法論の根幹、重出立証法、方言周圏論を批判的に継承するという立場も鮮明だった。方法論的な厳密さという点では、柳田の水準を優に超えていた。

また、和歌森は、石田英一郎らとは少し違った視点から、柳田の一国民俗学の限界を早くから指摘し、私にも、だからこそ、日本文化と異民族の有する文化との比較考察の重要性を説き、海外にフィールドを設定することを勧めてくれた。

1972年の暮れ、大学闘争に関する挫折感も手伝って、私は冗談混じりのうちに、日英米合同の国際ネス湖怪獣探検隊に身を投じることにした。隊員として、ネッシー

探索に参加することにしたのだ。

大学闘争における、自己否定の論理のなかで私は、民族学者（文化人類学者）、探検家は、宣教師や商人と同様、しょせんは侵略の尖兵の役割を果たす存在に過ぎないという認識に呻吟していた。自己矛盾をはらむ現実からの逃避行だった。

1973年初秋、スコットランドに出立する際、得手勝手な理由にならないような理由をくっつけて、（少なくとも半年間）学業を放擲することにした私を、和歌森は、洪面を以ってたしなめるところか、満面に笑みを浮かべながら、歓送の言葉をくれた。

『冗談から駒』ってこともあるんだから、じっくりスコットランドの人と民俗に接して来いよ。ただし、スコットランド美人にうつつをぬかしてちゃいかんぞ。鷗外みたいに、追っかけて来られんようにな。それから君は、ゆくゆくは、大学に残るつもりなんだろうな。行ってる間も、それだけは忘れちゃあいかんぞ

と、得意のダジャレと冗談を織り込みながら、ダメ押しまで加えて、爽やかに送り出してくれたのだった。女性にやたらともてる師ならではの、愉快的、しかし、心憎いばかりに配慮の行き届いた、ありがたい言葉だった。

「先生、僕を先生と同じように思わんといてください。僕は、先生じゃないんですから、身持ちは固いですからね。そんな御心配はまったく要りませんよ」

「あのなあ、君。人を好色みたいに言うなよ」

「えっ、先生、そうじゃないんですか。先生がプレーボーイっていう話は、代々の先輩からの重要な申し送り事項ですよ」

「うむ、まあ、そう言われちまうと、否定はできんかもしれんけどな。はっはっは」

こんな会話のやりとりが出来るきさくな師だった。勉強不足のやんちゃな弟子に対しても、とても懐の深い師だった。

こうなると、私は、ネス湖ではネッシー探検にいそしみながらも、丘回りの探検隊員としての立場を十分に生かして、ハイランド地方の民俗収集のフィールドワークに励まざるをえなかった次第である。人を乗せるのもうまい人だった。

軽妙な会話のなかの言葉にも温かみと説得力を醸し出せる人だった。

和歌森は、修験道史研究に関しても先駆者にして、第一人者でもある。⁽⁶⁾ 未だにその水準を超える業績は寡聞にして知らない。

骨のあるリベラルな歴史家として、その知名度の高さを生かして、社会的発言もきっちり行っていた。

日本政府が、けっして歴史的事実ではない2月11日を「建国記念の日」として制定しようとした時など、「単なる神話に依拠したような、史実に基づかない論拠で、恣意的にそんな日を制定するのは好ましくない、歴史に対する冒涇だ」と言って、和歌森は反対運動の先頭に立っていた。

そのために彼は、わけのわからない右翼につけ狙われたこともあった。

そんなときでも、平然としていて、まったく動揺がなく、鼻でせせら笑うように、右翼の脅しを一笑に付していた。豪快で頼もしげな師だった。

交際範囲も広く、和歌森と同じく東京教育大学の教授を務めていたノーベル物理学賞受賞学者の朝永振一郎、やはり同大教授で東京都知事になった美濃部亮吉、同学部学科の家永三郎、桜井徳太郎ら、大学、学界人脈は言うに及ばず、相撲講習所で教えていた関係もあって、春日野親方（元横綱、栃錦）や二子山親方（元横綱、若乃花）ら、相撲界を始めとするスポーツ界の人びと、松本清張、有吉佐和子らを始めとする文壇の人びとも親しく、人脈は多彩で、華麗だった。

朝永振一郎学長の、和歌森文学部長に対する信頼は厚く、この頃の学内におけるリベラルな雰囲気は、東の間の東京教育大学の極相期の源泉だった。

東京教育大学の筑波への移転反対闘争では、その反対の急先鋒だった文学部教授会のなかでも、殊に明快な反対論の論陣を張ったのが和歌森太郎と家永三郎だった。

1915年、梅棹忠夫と同じ誕生日、6月13日生まれの和歌森は、ちょうど五歳年下の梅棹や奈良本辰也ら、京都系の学者たちとも親しかった。歴史家の奈良本とは、勝海舟だの山岡鉄舟だの高橋泥舟だの、幕末の三舟等々を肴にしながらか、よく酒を酌み交わす仲だった。

異分野ながら、学問的関心が重なり合うところのある梅棹に関しては、やはり『文明の生態史観』を高く評価していた。

梅棹の思いつきと構想力はただものではねえぞ。おれもよく学界やなんかで『嵐を呼ぶ男』と呼ばれちまってるんだが、あいつも、『嵐を呼ぶ男』だよ。あいつの発表する論説は、実証は抜きなことも多いんだが、それでも多くのやつらを、オットうならせるんだ。大見えをきる歌舞伎役者みたいな華やかなところのある男だぜ。

こんな親しみのあるべらんめえ調で、和歌森は、梅棹の話をしてくれた。英雄、英雄を知る風だった。

私の眼から見ると、この東西の豪快で華麗な二人には、どこか人間的にも、学問的にも共通する点が多々あるように思われた。

「実証抜き」という和歌森の評価は、横山の梅棹に対する評価と共通しているが、それを指摘しながら、なお非常に高く梅棹を買っているところが両者に一層、共通していて面白かった。

後日、筑波移転に反対して東京教育大学教授を辞任した和歌森は、都留文科大学に学長として迎えられた。彼は、同大に新たに地域社会学科を構想した。設置認可の暁には、その新学科の一員として、私を招いてくれることになっていた。

和歌森は、その前に、他流試合の意味合いも込めて、京都大学人文科学研究所で修業しておくように、と一言してくれた。言うまでもなく、そこは梅棹が長らく研究の拠点としていたところだった。

かつて今西錦司、桑原武夫、鶴見俊輔、梅棹らが籍を置き、当時も会田雄次、林屋辰三郎、多田道太郎、上山春平、飛鳥井雅通、谷泰、河野健二、熊倉功、松井健、古川裕子らが集っていた同研究所は、インターディシプリナリーな領域に関する共同研究、それぞれの個別研究の双方で顕著な成果を上げている自由闊達な人文科学の知の殿堂だった。

その当時、梅棹は既に国立民族学博物館の館長（1974年就任）に転出していた。けれども、同館と京大人文研とは双子の兄弟みたいな存在だったから、両研究機関のつながりは深く、私は人文研と民博を往復しながら、梅棹の他にも、西洋史出身で文化人類学に移行した谷泰、農業経済学から文化人類学に移行した米山俊直といった、ちょうど当方が旬だった個性あふれる人類学の俊秀たちと接触する機会を得た。まだ近衛の楽友会館を根城にした京大人類学談話会も活発な時期だったので、大いに梅棹を始めとする京都系の人類学の息吹に触れることが出来た。

私は、郷里の京都で、「頑張って」修業を積みながら、文化人類学的方法論と歴史学的方法論との交叉融合のもと、対象に対して、構造的・共時的アプローチと歴史的・通時的アプローチを混淆させながら迫る方法を確立させて、和歌森の新構想のもとに馳せ参じる日を待ち望んでいた。

その私のもとに1977年4月7日、和歌森太郎の訃報が届いた。61歳。あまりに若すぎる死だった。

きつぷのいい「嵐を呼ぶ男」は、ついに甲斐の国で、

新たな嵐を呼び起こすことなく、黄泉の国へと旅立って行ってしまった。

3. 家永三郎、あるいはリベラルな良識派、あるいは国家権力と対峙した小さな巨人

家永三郎は、やや小柄だが、老いた後も艶やかな顔立ちで、いつも背筋がぴんと伸びていた。立て板に水、とはこういうことかと納得させられるような淀みのない、論理的な、スキのない話し方をする師だった。

毎年、丁寧に準備された講義ノートに基づく講義には寸分の無駄もなかった。学生たちが、過不足なく歴史の流れ、原因と結果との間のプロセスを把握できるように整然と話してくれた。講義中に、いわゆる脱線はあまりなかった。

この師に論戦を挑むためには、こちらにも相当の覚悟と理論武装が必要だった。ちょっとでも勉強不足、考察不足が露呈すれば、厳しくたしなめられた。論理的思考の欠落を見せれば、こてんぱんにやられた。やり返そうとして、よりいっそうやっつけられたことも、しばしばだった。学問的な討論の場での師は阿修羅のごとくだった。学生、大学院生といっても容赦なかった。

しかし、それは学生や大学院生を同じ学問を志向する学徒と認めてくれているからこそだった。だから、冷たい感じはまったくなかった。それどころか、雑談になると、陽だまりの縁側で、祖父と昔話をしているような心地よさに引きこんでくれる優しい好々爺に変身する温かな師だった。

顔は三角形だったが、性格は四角四面ではなく、柔和でまろやかな菩薩のような丸い人柄だった。温顔だった。

「あの家永さんのどこから、国家権力と闘うものすごい怒りのエネルギーが湧いてくるんだろう」と学生たちが不思議がるくらいに、普段は申し訳ないくらいに学生を大切にしてくれる温厚な紳士だった。

一見、とても弱弱しく見えるのに、そばにいと大樹の蔭にいるような安心感を覚えさせてくれる人だった。

へらへらという少々、形容として不適切で、若干、語弊があるかも知れない。けれども、家永が少しリラックスして話すときには、目つきがとても柔らかくなり、ほほ笑むと、眼鏡のなかの無垢な少年のように輝く瞳が確かにへらへらとなり、口元も緩んでへらへらとなるのだった。

彼の独特な笑い声は、鈴虫の鳴き声のような、また遠い日の少年のへらへらしたはにかみ笑いのような、それらの複合のような親しみ深い音声だった。

ややかん高い、涼しげなよく通る声で滔々と話す師

だった。

家永の体重はいつも38キログラム。「東京教育大学の教職員健康診断時の男女合わせての体重の最低記録はいつも私でした」と自慢していた。

その最高に軽い男が、人生の後半生を、理不尽な国家権力と闘い続けたのだった。歴史に残る重い闘争だった。

そのせいだろう、家永三郎というと、江湖では、教科書裁判の原告としてつとに知られている人物ということになる。

彼の生前から、そうだった。だから、その死後には、彼の意志に反して、その傾向はいつそう強まってしまっている。

家永三郎＝教科書裁判の闘士という図式である。

家永が、一番、嫌っていたのが、実はこの図式だった。

自らの思想史家としての業績、力量に自信を持ち、密かに自らを丸山真男や大塚久雄らと並称されるべき戦後日本リベラル良識派の旗手というような位置に措定していたであろう家永にしてみれば、余りに長きに渡り、彼の人生のもろもろをかなり規制したとはいえ、教科書訴訟は、教科書検定という憲法違反を糾すための止むを得ざる偶然の出来事に過ぎなかったのだ。⁽⁷⁾

あくまで、一頭地を抜く思想史関連の研究の蓄積こそ自らの評価されるべき本領というのが、家永の当然の矜持なのだ。古代史から、近現代史に至るまでの彼の業績は枚挙にいとまがないほどである。⁽⁸⁾

なぜ家永には著作が多いのか。その秘密を晩年に語ってくれたことがある。

私は小さいころから病弱でしたからね。医師は私の父親（家永の父は、陸軍少将家永直太郎）には、この子はいつ死んでもおかしくないと言っていたそうですよ。長じてからも、ご覧の通りのやせぎすで蒲柳の質ですから、いつ死ぬかわからないといつも思っているんですよ。ですから、畢生の大著と言って、一生に、一、二冊だけ本を出す学者もいますが、私には、そんな悠長な余裕はないんですよ。明日にもXデーが来るかもしれないから、一年、一年が勝負なんです。だから、だいたい一年に一冊ずつ、本を出すことにしているんですよ。

家永の死生観の一端に触れさせてくれるとともに、学者の業績の出し方に示唆を与えてくれる一言だった。

何気ないような日常会話のなかにも学ぶべきことを煌めかせてくれる師だった。東京教育大学を定年退官後、一年だけ、悠々自適の生活をした後、中央大学法学部教

授に就任、同大をも退職した後の晩年の家永を、私は折りに触れて定期便のごとく、大泉学園の家に訪ねては教えを乞うていた。

自宅では和服でくつろぐ家永だった。塩沢緋に名古屋帯姿が瘦身に似合っていた。

お邪魔して、二階の洋間で師と歓談していると、ほどなく美夜子夫人（この人は奇しくも横山亮一が慕う社会学者、新明正道の息女だった）が香り高い紅茶とケーキを持ってきてくれて、しばし話の輪のなかに入り（横山等々、共通の話題もいろいろあったので）、しばらくすると階下に降りて行き、二時間後には、今度は、芳ばしい煎茶とお饅頭をもって再び現れてくれた。

師も私も、酒はダメだが、ケーキやお饅頭など、甘いお菓子には目がなかったので、いつそう会話が弾んだ。不出来な、まさに不肖の弟子の私には、とても甘い、ありがたい師と夫人だった。

ちなみに、本学の前身、東海女子大学草創期に文学部長として活躍されていた松野達雄教授は、ほろ酔い加減になると、自分は東北大学の学生時代には新明正道教授の内弟子で、同教授の期待を一身に集めていた一番弟子だったと自慢げに話しておられたが、どうやら、この自己申告は酒が言わせた大言壮語ではなく、割合にその通りだったらしく、美夜子夫人も松野教授のことはよく覚えていて、懐かしげだった。

私の卒論が後年、単行本として出版されることになったのも、一にかかって、この師の力添えによるものだった。学術雑誌に何度かに分けて掲載してもらおうかと思って、家永に相談したら、彼は精読したいから一晩預かると言ってくれた。

その日の夜遅く、師の家を辞して帰宅した私の寝込みを襲うかのように、家永から電話が入った。

「あっ、先生、今日はどうも遅くまでお邪魔いたしました、ありがとうございます」

という私の月並みな挨拶など、吹き飛ばすように家永は話し始めた。

「先ほど、あなたからお預かりした原稿ですが、早速、読みました。これは近現代史研究の王道に行く、なかなか良い作品ですよ。すぐに出版しましょう。明日の朝にでも吉川弘文館の出版部長に推薦文を書きますから」。⁽⁹⁾

浅学非才、知性の貧困を自覚、自認する私には、恥づかしいような、過ぎたる、もったいなさすぎる言葉だった。

「まさか…あの歴史書出版の最高峰の吉川弘文館…」

絶句した。回りが真っ白になって、気が遠くなり、ぶっ倒れそうになった。我と我が耳を疑った後、舞い上がっ

た。心臓が高鳴った。

ドラフトでお目当ての意中の球団から一位指名を受けたような心境だった。

横山からも、和歌森からも、梅棹からも、三十代始めまでには最初の本を出すように言われていた。それが、実現する。夢みたいだった。

家永は、この処女作に、師としての思いを込めた序文を寄せてくれた。

後日、感謝いっぱい感激いっぱいの面持ちで刷り上がったばかりの出来立てのほやほやの拙著を持参した私に、家永はこう言った。

おめでとう。これで歴史学者としてのスタートラインに立てましたね。本当に良かった。確か、和歌森君も、卒論を処女作として本にしていますよ。その後は、あの通り、天下の和歌森ですからね。君も、最初の本がフロックでなかったことを証明するためにも、二冊目、三冊目、四冊目、五冊目…と、どんどん成果を公刊してくださいよ。期待していますからね。

心に期するものを持たせてくれる師の言葉だった。これこそが教育者だなと感じさせてくれた。この言葉に背中を押されて、二冊目の刊行が叶った時、家永は過分な書評を書いてくれた。そして、

「この『頑張り』の構造』は京都の梅棹忠夫君にも読んでもらおうと良いと思いますよ」という願ってもない忠告を与えてくれたのだった。

私の学問的方法論に関する志向の彼方に、歴史的視座と文化人類学的視座の交叉融合があることを喝破しての、そして家永自身も自らの学風とは全く違う梅棹を高く評価しているがゆえの、適切かつ有効なアドバイスだった。

学恩のみならず、人生のもろもろに関しても、信じられないくらいに良く目をかけてくれた師だった。

海外各地から、フィールドワークの合間に家永に近況報告の手紙を出すと、着くと同時に書いてくれたと思われる返事が一週間後くらいには私の元に届いた。かのケネディ家の家訓の一つに、手紙をもらったら、すぐに返事を書くこと、というのががあるが、家永もまさにそれを信条としているようだった。

貴重な示唆やねぎらいや励ましの言葉に溢れた、によりよとした、あまり上手くない日本文字で書かれた師の手紙に、私は異郷での無聊を大いに慰められたものだった。

「知性の貧困を行動でカバーする」と称して世界中を

飛び回っていた私が、帰国してまず訪ねたのが、自宅からさほど遠くない大泉学園の師のお宅だった。家永は私のフィールドワークの成果やその周辺の体験談を話すと、珍しがって耳を傾けてくれた。不肖の弟子の体験談すら、大所高所から把握して、それを文明観、歴史観、世界観へとつなげてくれた。⁽¹⁰⁾

2001年、家永は、ジョン・ダワー、ノーム・チョムスキー、ブルース・カミングスら、アメリカ合衆国の著名な学者を始め、日本を含む世界各国の多数の学者、大学教授、国会議員らから、国家権力に抗して、言論表現の自由を求める運動を進める人物として、ノーベル平和賞の候補に推されている。もし受賞が実現していたら、これは、カール・フォン・オシエツキー、マーティン・ルーサー・キング Jr.、アンドレイ・サハロフ、マザー・テレサ、シェイマス・ヒーニー、劉曉波といった人びとの受賞と並ぶ価値のある受賞となっていたことであろう。

2002年11月29日、家永三郎は、いつもの通り、美夜子夫人と規則正しく夕食を摂ったしばらくの後、すうーっと大地に吸い寄せられるように静かに倒れこみ、そのまま息を引き取った。89歳の暁の上での大往生だった。⁽¹¹⁾

4. 梅棹忠夫、あるいは雅やかな知的高等遊民

拙著『「頑張り」の構造～日本人の行動原理～』（1986年、吉川弘文館）に対して、梅棹は開口一番、こう言った。

なかなか、おもしろい発想と考察やったわ。確か、多田さん（＝多田道太郎京大人文研教授…筆者注）やら荒木博之君らも、『頑張り』について、関心持って、こねくりまわしたはったけど、正面に『頑張り』を据えて、日本人の民族性やら、日本文化を論じたんは、君が初めてちゃうかいなあ。まあ、日本人の『頑張り』の淵源を外来種のオリザ・サティバの水田稲作農耕に求めたあたりの論調に関しては、まだ実証不足やとは思うけどな。そやけど、その箇所かて、仮説としては、十分、うならせられるもんがあるし、ほんま、結構おもしろかったわ。

他者の論著に対して梅棹が、「おもしろい」（＝「面白い」の関西弁表現だが、実際のニュアンスとしては、「おもしろい」のほうが、「面白い」より数段、面白いことを意味する場合が多い）と表現することは、かなり高く評価していることを意味することを知っている私は欣喜雀躍、「ほんまですか～」とにんまり声を弾ませていた。

愚人を喜ばせておいて、すかさず梅棹は言葉を続けた。

『頑張り』に関する研究は、これだけで終わらさんと、君の移民研究やらと連動させながら、いっそう深化させていたらええと思うわ。『頑張り』第二弾、第三弾の天沼節を期待してまっせ。とともにやなあ、なんか、ぼーんとスケールの大きな発想で、世界文明を語るようなことも考えてみたらどや」。

この師も、おだてて人を育てるのが極めてうまい人だった。やはり、一流のフィールドワーカーであり、研究者であり、一流の教育者だった。

この師の言葉が、拙著『日本人はなぜ頑張るのか～日本人の歴史・民族性・人間関係～』（2004年、第三書館）に繋がっていったことは言うまでもない。

しかし、いまだに私は、梅棹の言う「スケールの大きな発想をもとに世界文明を語る」ような業績は紡ぎ出していない。師、亡き今日、なんとかかせねば、と徒に無い知恵を絞るばかりである。

さて、梅棹忠夫という人物を一言で言い表すのに、「高等遊民」と言う表現ほど有効な言葉はないだろう。

彼自身、それを自認していたし、自ら吹聴するわけではないが、他者からそう見られ、そう言われることを好んで了としていたように思う。

実際、京都の裕福な家庭に生まれ、学才と体力と経済力に恵まれ、京都一中を経て、第三高等学校生徒の時代から山岳部で鳴らし、京都帝国大学理学部生物学科動物学専攻の学生時代には、大興安嶺探検に参加し、以降、日本におけるフィールドワーカーのバイオニヤとして縦横無尽の活躍をするなかで、徐々に学問的関心を動物生態学から、文化人類学へと移行させていった、この行跡だけを見ても、彼は高等遊民と呼ばれるに相応しい人間といえよう。

京大生の時代に今西錦司や木原均らの知遇を得たことは、梅棹にとっては素晴らしい僥倖だった。

やはり学問的にも、人間的にも尊敬でき、信頼できる師、先達、好敵手との出会いは、学問人にとっては必要不可欠なことなのだ。

確かに、横山亮一に福武直あり、磯村英一あり。和歌森太郎に柳田国男あり、肥後和男あり、堀一郎あり。家永三郎に丸山真男あり、大塚久雄あり。梅棹忠夫に今西錦司あり、桑原武夫あり、中尾佐助あり、伊谷純一郎あり、川喜多二郎あり。

梅棹も著作の多い人だった。⁽¹²⁾ 彼も、家永とは違った意味で、次々と著作を世に問う研究者だった。こんこんとわき出る泉のごとく、豊かな発想力を持つ彼は、その発想をもとに仮説を設定し、その一応の妥当性を検証する。そうした段階で、一つの論説にまとめることが得

意な学者だった。

それこそ横山ではないが、後の「ちまちま、こせこせ、こそこそしたような実証」は、後進に任せてしまってもよい、というくらいの認識を梅棹は持っていたように思われる。自らは、こせこせ実証に時間を費やすくらいなら、次なる新たな発想に向けて飛翔したほうが、どれほどか学界にも世間にも貢献できるという考えだったのでないだろうか。

もちろん、名うてのフィールドワーカーたる梅棹なのだから、実証をまったく無視していたわけではないところが、その重要性は十二分に認識していた。でありながら、自らの傑出した発想力を熟知しているだけに、「こそこそ実証」に時間をかけ過ぎて、それが新たな発想の邪魔になることを彼は忌避しようとしていたのであろう。

こうした自意識、視点、学問的方法だけをとってみても、なんとも個性的で、高等遊民的で、「おもしろい」のが梅棹だった。彼の華やかな探検歴はつとに知られているところだから、今回はそれらについて言及することはやめておこう。その探検に際して、また、その延長線上にあると思われる国立民族学博物館新設に際しての、梅棹の水際立ったリーダーシップはほれぼれするほどの手際だった。それこそ、天賦の才と言うべきだろう。

1974年6月、梅棹は、自らが手がけた同博物館館長に就任した。研究機関であるとともに、展示施設であることを意識した、これまでの日本の古色蒼然たる博物館のイメージからは程遠い常設並びに企画展示は、1970年開催の大阪万博以降、いっそう日本が国際化の状況に入りこむなか、大切でありながら、ともすれば等閑視されがちな異文化理解、国際理解に向けた発信をし続けた。この発信力も梅棹の剛腕に因るところが大きいことは言うまでもない。

梅棹は、1986年、視力を失った。いずれは回復するかと思われた視力はついに戻ることはなかった。我が敬慕する師たちは、横山、梅棹と二人までが酷薄にも光を奪われてしまったのだった。

しかし、横山が、しばし自暴自棄の時はあったにせよ、光を失くしても学問への関心を、これっぽっちも喪失しなかったのと同様、梅棹の学問への情熱もまた、いささかも揺るがなかった。

私事に渡り恐縮だが、緑内障を患い、失明の恐怖との戦いを続けている私にとって、この敬愛することこの上ない二人の師の、失明後も一向に変わらない明るさ、学問へのひたむきな姿、他者への思いやりは、救いのある啓示のように思われる。

まあ、どうでもええようなもんやけど、もろといても

邪魔になるもんでもないし…というような鷹揚な乗りのなかで、梅棹は、1991年には文化功労者、1994年には文化勲章を受章、翌95年には、京都市の名誉市民に選ばれた。京都大学、民族学博物館、総合研究大学院大学の三者からは、名誉教授の称号も得た。

世間的に、ごく一般的に言えば、功なり名遂げた感のある、この師は、そんな一身の世俗の榮譽にもまったく驕ることなく、むしろ以前にも増して、世界文明、日本文明の来し方行く末に強い関心を持ち、旺盛な執筆活動、社会活動を続けていた。

そんな中、2010年7月3日、梅棹は、静かに、その雅やかだった学問人生に終止符を打った。

【注】

- (1) 横山亮一の主要業績は、彼の主著である以下の著作にほぼ収録されている。
横山亮一『都市社会学への視座』（1990年、海越出版社）。
同『社会学的人格観』（1991年、丸善）。
同『社会科学的視点～主として社会学の立場から～』（1995年、丸善）。
- (2) このあたりの事情に関しては、前掲、横山『都市社会学への視座』所収の天沼香「横山亮一先生のこと」、
同『社会学的人格観』所収の天沼「はしがきに代えて」、
同『社会科学的視点』所収の天沼「序に添えて」等に詳しい。
- (3) 同上
- (4) 和歌森太郎の主要著作は、『和歌森太郎著作集』全16巻（1980～83年、弘文堂）に収められているが、わけても民俗学と歴史学の学際領域を意識した、彼の独壇場の著作は、以下のとおりである。
和歌森『日本民俗学概説』（1947年、東海書房）。
同『歴史と民俗学』（1951年、実業之日本社）。
同『日本民俗学』（1953年、弘文堂）。
同『歴史研究と民俗学』（1969年、弘文堂）。
同『柳田国男と歴史学』（1975年、日本放送出版協会）。
- (5) 和歌森は、全国の民俗調査を主宰し、その成果「民俗調査報告」を吉川弘文館から刊行している。
- (6) 和歌森太郎『修験道史研究』（1942年、河出書房）。
- (7) 家永三郎の第一次～第三次（1965～84年）に渡る教科書訴訟、そして教科書裁判は、教科書検定という検閲に等しい制度を堅持しようとする文部省（現、文部科学省）＝国家権力に対する言論、表現の自由を求める一学者の声、広範な支持を受け、家永を囲む連帯の輪が広がって行った国民的な運動というように位置付けられる歴史的な事件である。1965年に提訴された第一次訴訟から、第三次訴訟に対する最高裁判決の出た1997年まで、32年間に及ぶ裁判闘争だった。

その間、1967年6月提訴の第二次訴訟では、1970年7月、東京地裁は、1966年の教科書検定における家永著『新日本史』に対する不合格処分への処分取り消し請求を認め、教科書検定そのものが憲法に違反する検閲に該当するという画期的な判決を出した。原告側の全面勝訴だった。これ

が、世に言う杉本判決である。

家永は、この民事訴訟を起こすに際して、これは、自らの学問的良心に基づいて行うものだから、他の人びとには迷惑はかけたくないので、自分ひとりで闘うという立場を鮮明にしていたが、結果的に家永支援の輪は学界、教育界、言論界を中心に幅広く国民の間に浸透していった。

この訴訟、裁判の経緯に関しては、『家永三郎集』全16巻のうちの第8巻「裁判批判 教科書検定論」、第14巻「評論3 歴史教育 教科書裁判」等々、家永自身の手になる著作のほかにも、多くの著作が公刊されており、私もまた別稿を用意しているので、ここでは、これ以上の詳細には触れないこととする。

- (8) 家永三郎の主要著作は、上記『家永三郎集』全16巻（1997～99年、岩波書店）に収録されていると言いたいところだが、そこからは、名著中の名著と言うべき『日本文化史』、『太平洋戦争』等、多くの彼の重要な著作が欠け落ちてしまっている。
以下に、思想史的に重要な彼の著作を列挙しておこう。
家永『日本思想史に於ける否定の論理の発達』（1935年、弘文堂）。
同『上代倭絵全史』（1946年、高桐書院）。
同『上宮聖徳法王帝説の研究』（1953年、三省堂書店）。
同『植木枝盛研究』（1960年、岩波書店）。
同『太平洋戦争』（1968年、同上）。
同『津田左右吉の思想史的研究』（1972年、同上）。
同『田辺元の思想史的研究』（1974年、法政大学出版局）。
同『戦争責任』（1985年、岩波書店）。
- (9) 天沼香『ある「大正」の精神～建築史家天沼俊一 の思想と生活～』（1982年、吉川弘文館）。
- (10) 天沼香「家永三郎という生き方～魂の自由を生涯追求～」(2003年1月5日、岐阜新聞朝刊)。後、『家永三郎・人と学問』（2003年、家永三郎先生を偲ぶ会編・発行）に収録。
- (11) 同上。
- (12) 梅棹の主要著作は、『梅棹忠夫著作集』（1989～93年、中央公論社）に収録されている。私が、大変に影響を受けたのは特に、以下の二冊と「妻無用論」である。
梅棹『モゴール族探検記』（1956年、岩波書店）。
同『文明の生態史観』（1967年、中央公論社）。
ちなみに、梅棹の「妻無用論」に関しては、私は拙著『日本史小百科（近代）家族』（1991年、東京堂出版）で詳しく論じている。
『文明の生態史観』に関しては、他の拙稿で詳述するので、ここでは触れないこととする。